

二〇一四年度福岡市文学館企画展「運動族 花田清輝 ：骨を斬らせて肉を斬る」

大場, 健司
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程2年

<https://doi.org/10.15017/1787571>

出版情報 : 九大日文. 26, pp.107-110, 2015-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

二〇一四年度福岡市文学館企 画展「運動族 花田清輝—— 骨を斬らせて肉を斬る」

大場 健オホバ ケン 司

二〇一四年一月六日から二月一四日まで、福岡市総合図書館と福岡市文学館において、企画展「運動族 花田清輝——骨を斬らせて肉を斬る」が開催された。第一会場の福岡市総合図書館では、花田清輝（一九〇九—一九七四年）の仕事が時系列に沿って概説され、第二会場の福岡市文学館では、花田の作品が単行本単位で紹介された。

また、企画展の図録として、福岡市文学館編『運動族 花田清輝』（福岡市文学館、二〇一四年一月）が出版されており、筆者は拙稿「負けるが勝ち——花田清輝『小説平家』と吉川英治、安部公房、J・P・サルトル」において、花田の『小説平家』における「転形期」とジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) の『聖ジャンネ』（Saint Genet, 1952）における「回転装置」(tourniquet) の類似性について論じた。先行研究においても論じられることの少ない国家主義団体、東方会との関係について、有馬学「東方会、『東大陸』——『東大陸』誌上における

花田清輝——「国家」をめぐる——」において論じられていることが、この図録の特色である（近年の批評では、千坂恭二「思想としてのファシズム」(彩流社、二〇一五年七月)においても、東方会と花田ら左翼知識人の関係が扱われている）。

企画展では、図録に収録された論考を短くまとめたものが、作品解説として展示されていた。また、企画展と並行して、企画展ワーキンググループの田代ゆき氏と田中芳秀氏による編集で、花田の文章を収録した『花田清輝批評集——骨を斬らせて肉を斬る』（忘羊社、二〇一四年一月）が出版されており、花田清輝再発見の機運が高まっている。また、この企画展については、『思想運動』（二〇一四年二月一日付）や『週刊読書人』（二〇一五年一月二日付）のみならず、『毎日新聞』（二〇一四年一月三日付西部朝刊）や『朝日新聞』（二〇一四年二月二日付福岡朝刊）、『西日本新聞』（二〇一四年二月五日付朝刊）、『読売新聞』（二〇一四年二月六日付西部朝刊）、といった新聞メディアでも取り上げられて注目されている。

筆者はこれまで、安部公房（一九二四—一九九三年）を研究する際に、花田の文章を資料として読んできたが、今回の企画展／図録をとおして、花田の全体像を描くことができたように思われる。これまで、花田に関する単行本では、花田の文章を吟味するというよりは、花田の思想が主に扱われていたと言ってもよい。しかし、今回の企画展の図録では、それぞれの作品に焦点が当てられて批評家の全体像が示されており、花田清輝研究者のみならず、安部公房など周辺の作家を研究する際にも良い

参考となるだろう。

福岡市文学館では、これまで、福岡ゆかりの作家・文芸誌に注目し、「大西巨人・走り続ける作家」（二〇〇八年度）や「黎明の歌 詩人・加藤介春」（二〇〇九年度）、「壇と眞鍋」（二〇一〇年度）、「サークル誌の時代——労働者の文学運動 1950s-60 年代福岡——」（二〇一一年度）、「青春への恋文 文芸誌「午前」とその周辺」（二〇一二年度）、「さとはふくおか——作家たちに愛された黒田官兵衛」（二〇一三年度）といった企画展が行われてきた。

ここで重要なのは、大西巨人（一九一六—二〇一四年）や、サークル誌における労働者の文学運動といった、「芸術運動」＝「政治運動」を行ってきた作家や文学運動が扱われていることである。今回の企画展で花田清輝が扱われたのも、その流れにあると言ってもよい。これまで、花田清輝に関しては『新日本文学』や『社会評論』といった雑誌で取り上げられることが多かった。周知のように、『新日本文学』は花田が議長を務めた新日本文学会（一九四五—二〇〇五年）の機関誌のことであり、『社会評論』は花田と近い立場の文芸評論家、武井昭夫（一九二七—二〇一〇年）らによって結成された活動家集団思想運動（一九六九年）の機関誌のことである。その『社会評論』に掲載された、企画展ワーキンググループの田代氏と田中氏の対談「企画展「運動族 花田清輝」を開催して——企画および参加者との討議の中で考えたこと」（『社会評論』二〇一五年冬号）では、「いまなぜ花田清輝か」（六頁）という問いに対し、田中氏は、花田が「分断された個人と状況の閉塞感を汲み取り、組織することの重要性を、

革命運動、芸術運動内に向け続け」（七頁）たことを再考するべきだと述べている。

このような「運動」こそが、企画展のタイトルにある「運動族」の「運動」である。花田はエッセイ「パーティ族と運動族」（『風景』一九六六年六月号）において、「運動族」を、新日本文学会という「根拠地」から「遊撃戦」を行うものとして規定している（『花田清輝全集』第二三巻 講談社、一九七八年八月）四三—四四頁。その「運動族」と二項対立的な関係にあるのが、「文学団体を、あくまで政党の外郭団体としてしか」（四三頁）見ようとしなない「パーティ族」である。「パーティ族」が論争や対立を行わずに政党（party）に従属する「ベトついた人間関係」（四三頁）を好むのとは反対に、「運動族」は「仕事をとおして、お互いに運動の意識はあるにしても、ほとんど個人的なつきあい」がない「さばさばした人間関係」を好む（四二—四三頁）。政党や立場からのズレ、対立を内包する「運動族」にこそ、異なる「他者」を排除しないアソシエーションの可能性があるだろう。

二〇一四年二月六日に福岡市総合図書館で行われたトークイベント「花田清輝×われわれ」では、そのような「運動族」の可能性が討議されていたが、筆者は考えがまとまらず、発言できなかった内容があったので、ここに筆者の意見を述べておく。これまで見てきたように、花田の「運動族」が、教条的なマルクス主義に見られるような「ツリー型」の組織（パーティ族）と異なっているとすれば、それはどのようなものだろうか。花田はエッセイ「日本における知識人の役割」（『知性』一九五六年

三月号)において、アナキズムについて次のように述べている。

日本の社会主義リアリズムが、アヴァンギャルド芸術を否定して、その積極的な要素を、みずからのなかに生かしきつていないように、日本のコンミニズムは、アナルコ・サンジカリズムと対決したい、なにか相手からたいせつな要素をとりいれることに失敗しているのではないかと考えているのだ。(『花田清輝全集』第六卷(講談社、一九七八年一月)三二頁)

したがって、花田の「運動族」が、アナキズム(アナルコ・サンジカリズム)から、どのような要素を取り入れたかが重要な問題になる。花田の言葉で言えば、それは「プロレタリアートの自然発生的に本能的な欲求」を捉える「アナルコ・サンジカリズム」(『政治的動物について』(『花田清輝全集』第六卷、講談社、一九七八年一月)一六頁)という、アナボル論争で言うところのマルクス主義の対立物を、対立させたまま、統一した「運動族」ということになるだろう。これまで、花田とアナキズムの関係を論じた先行研究は少ないが、哲学の分野では、三宅芳夫「外の思考——ジャン・ポール・サルトルと花田清輝」(『理想』二〇〇〇年八月号)において、アナキズムを媒介にしてサルトル/花田の類似性が示されている(八四頁)。花田はマルクス主義者としての側面が強調されてきたが、アナキズムとの関係性もまた、論じられる必要があるだろう。そして、花田の弟子とも言える

安部公房が、日本共産党除名(一九六二年二月)後にアナキズム的な作品を書いていることも、注目すべきことである。

このように、福岡市文学館では大衆向けの文学講座・企画展が積極的に行なわれてきた。そして、二〇一五年度には、平成二十七年科学研究費助成事業/福岡市文学館市民公開講座として、「モダンの文学、モダンなアジア——一九二〇、三〇年代の上海、台北、ソウル、そして福岡」が開催されており、李征(復旦大学)「紙上の冒険…中国近代文学における日本表象の流通と再生産」(二〇一五年七月一日)、呉佩珍(台湾国立政治大学)「台湾モダニズムにおける文学と絵画：1930-40年代を中心に」(二〇一五年八月二九日)、キム・イェリ(江原大学)「1950年代韓国モダニズム文学と李箱」(二〇一六年一月九日)、波瀾剛(九州大学)「モダン都市福岡の文学と文化」(二〇一六年一月三〇日)が行われることになっていく。

最後に、企画展、イベントの詳細と図録の目次を記しておく。

【企画展】

○「運動族 花田清輝——骨を斬らせて肉を斬る」

場所 福岡市総合図書館一階ギャラリー

福岡市文学館(福岡市赤煉瓦文化館一階)

日時 二〇一四年一月六日—二月一四日

【イベント】

○赤煉瓦夜話 vol.58 「画家桂ゆきの批評精神」

場所 福岡市文学館（福岡市赤煉瓦文化館二階）

日時 二〇一四年一〇月一六日

講師 濱本聰（下関市立美術館館長）

○読書講座「花田清輝を読む」

第一回「太刀先の見切り」（二〇一四年一月二〇日）

第二回「テレザ・パンザの手紙」（二〇一四年二月二七日）

第三回「偶然の問題」（二〇一四年二月四日）

場所 福岡市赤煉瓦文化館二階第三会議室

報告司会 企画展ワーキンググループ（田代ゆき、田中芳秀）

○トークイベント「花田清輝×われわれ」

場所 福岡市総合図書館三階第一会議室

日時 二〇一四年一二月六日

トーク 田中芳秀

【図録】

○福岡市文学館編『運動族 花田清輝』

目次

濱本聰「桂ゆきの批評精神」

はじめに

第一章 読書と、困窮の日々

第二章 戦時下の抵抗／有馬学「東方会、『東大陸』」／文化

再出発の会／中野秀人／『自明の理』／真善美社／

『復興期の精神』／『錯乱の論理』／夜の会／菅本康之『アヴァンギャルド芸術』

第三章 大衆運動としての批評／新日本文学会／編集者 花

田清輝／『さちゆこりん』／モリスト論争／『乱

世をいかに生きるか』／『大衆のエネルギ』／前

田年昭「義侠でもなく同情でもなく、集団名詞の抵

抗者として——花田清輝と魯迅——」／記録芸術の

会／一つの花田清輝論——詩人、長谷川龍生さんに

聞く

第四章

総合芸術への挑戦／岡田秀則『新編映画的思考』

／足立正生「そして破壊と創造の永続運動へ——花

田清輝論考」／『運動族の意見——映画問答』／「も

のみな歌でおわる」／『泥棒論語』／『爆裂弾記』

／「首が飛んでも——眉間尺」／古典芸能・テレビ

第五章

近代の超克／立野正裕『鳥獣戯話』／大場健司『小

説平家』／中野和典『室町小曲集』

第六章

死／『花田清輝全集』刊行／久保覚の仕事

おわりに

花田清輝年譜 1909~1974

参考文献、関連文献

（二〇一四年一月六日 福岡市文学館 一二〇頁 一〇〇〇円税込）
（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程二年）